

葛藤する善意 ～ タイ山岳少数民族支援施設の現場から～

松永 夕紀
北九州市立大学文学部人間関係学科

目次

はじめに	少数民族の青年
第一章 タイについて	第五節 谷口氏の苦悩
第一節 タイの概要	第四章 若竹寮
第二節 タイの社会構造と産業構造	第一節 若竹寮運営方針
第二章 チェンライ県、パヤオ県、山岳	第二節 若竹寮の子どもたち
少数民族	第三節 里親への手紙
第一節 チェンライ県の概要	第四節 ヨハンについて
第二節 パヤオ県の概要	第五章 熊本YMCAについて
第三節 山岳少数民族の概要	第一節 熊本YMCAの始まりと使命
第四節 山岳少数民族を取り巻く状況	第二節 里親制度の意義と現地との距離
第三章 21世紀農場	考察
第一節 21世紀農場と谷口夫妻	結論
第二節 谷口巴三郎氏の経歴	参考文献
第三節 谷口氏の哲学	資料
第四節 農場に勉強に来ている山岳	

要旨

筆者は、タイで2002年3月と2002年7月にあわせて一ヶ月にわたりフィールド調査を行なった。調査地としてパヤオ県の21世紀農場、チェンライ県の若竹寮に滞在し、参与観察とインタビューを行なった。これらの二つの施設は、日本人支援者からの支援金によって運営されているが、運営者の立場が両者で異なっている。21世紀農場は日本人NGO活動者である谷口巴三郎氏、若竹寮は山岳少数民族出身のヨハン・チェルマー氏が運営を行なっている。前者は支援する側が直接運営を行なっている支援施設として、後者は支援される側が直接運営を行なっている支援施設として紹介している。本論文では、山岳少数民族が現在のタイ社会においてどのように問題視されているのか、これら二つの支援施設の現状と、支援する側される側のおのおのが抱える問題点を書き出していく。タイは数多くの日本人NGO団体が活動を行なっているが、本論文で紹介する二つの支援施設は継続性、功績からも支援形態としては成功例として考えられる。しかし、現場での調査では施設運営者や支援する側の葛藤がみられた。筆者は、これらの葛藤が現代の国際支援のあり方を問ううえで、重要な要素であると考えた。支援施設に対して日本側の思い込みとタイ側の現状を把握し、国際支援を行なう上での課題を提示していきたいと思う。

2はじめに

タイ北部は国土の4割が山岳地帯であり、山々には国籍を持たない山岳少数民族と呼ばれる人々が数多く住み着いている。国籍を持たないがゆえに、タイの社会問題に山岳少数民族複雑に関わっている。彼らの問題解決と自立支援のために、日本からも多くのNGO活動が行なわれている。筆者は、タイのチェンライ県にある日本人教育里親の支援によって運営されている「若竹寮」と、パヤオ県にある日本人NGO活動者谷口巴三郎氏が経営する「21世紀農場」を調査地として選び、2002年6月30日から7月25日のあいだ参与観察とインタビューによるフィールド調査を行なった。フィールドで出会った人々と生活していくうちに、一見うまく運営されているふたつの支援施設にも日本と現地、そして日本人とタイ人・山岳民族の人々のあいだに数多くのすれ違いや誤解があることがわかった。この論文では、これら2つの山岳民族支援施設の紹介と現状での問題点、それぞれの経営者と日本人支援側とのつながりを述べる。また、日本人が思いこみがちな支援のあり方や経営方針について論じたいと思う。

第一章 タイについて

第一節 タイの概要

この論文では、タイに対する援助のあり方を考える。その上で、必要な情報として支援が行なわれているタイという国の概要にふれておきたい。

タイは北緯5度から20度に位置する熱帯の国であり、一年は雨季と乾季にはっきりと分かれている。雨季は南西季節風の吹く5月ごろから10月ごろまでであり、残る期間は乾季である(萩原 1998)。乾季はさらに10月から2月までの乾期と2月中旬から5月までの暑期に分けられる。

タイの政体は立憲君主制であり、現国王のプミポン・アドゥンヤデート国王は国民の絶大な信頼と尊敬を受けている。宗教は国民の9割以上が小乗仏教に帰依しており、他には南部にイスラム教徒、北部山岳地帯に精霊信仰の山岳少数民族がいる。タイは東南アジアのなかで唯一諸外国からの植民地支配を受けていない独立国であったため、比較的恵まれた状況から国民形成を開

始できたといえる。しかし国家間の境界が引かれ、確定されてからまだ十分な期間がたっていない東南アジア地域では、地域社会と国家の関係が十分に成熟しているとは言いがたい(川崎 1993)。

国土の総面積は513,114平方キロメートルで、北部、中央平原、南部および東北部に分けることができる。タイの4地域はそれぞれ特徴のある地方文化をもっている(萩原 1998)。

北部はインタノン山をはじめとする山岳地帯である。北部は農業以外にこれといった産業は見られず、バンコクへの出稼ぎ労働者は数多い。言語はビルマや中国雲南省と共通のタイ語、北タイ語を使用し、山岳民族の文化を保持している。

中央平原は、中国南部からの移住者である華人がタイ人に同化し、経済の実権を握っている。首都であるバンコクを流れるチャオ・プラヤー川は水上交通としても利用されている。

東北部は赤土の高原地帯が延々と続き、干ばつの被害を受けやすい。言語はラオスのラーオ語とほぼ同言語である。この地域はイサーン地方と呼ばれ、タイにおける貧困の代名詞となっている。東北部も北部と同様に、農業以外に産業は発達しておらず、バンコクへの出稼ぎによる収入が家計を支えていることが多い。

南部は熱帯性気候で、リゾート地化などの観光業が盛んである。また、ゴム、ココヤシ、錫の産地としても名高い。マレーシアに南下するにしたがって、マレー系の人々が増えイスラム教徒も増える。

第二節 タイの社会構造と産業構造

援助を考える上で、タイの社会構造と産業についてもふれておく必要がある。

タイの社会関係は、「保護者 - 被保護者」という二極分化した上下関係が基盤となっている。このような上下関係はアユタヤ王朝(1351~1767)時の位階制(サクディナー制)までさかのぼることができる。王族、貴族と被支配層である平民、奴隷までの身分法が制定されていた。「財政力、政治力、社会的影響力をもつ」保護する人と、「財政力、政治力、社会的影響力をもたず」保護を受ける人の「保護 - 被

護」関係である(萩原 1998)。このような固定した身分関係は、現代も権利義務関係に転化された形でタイ社会に根強く残っている。また、タイ社会では社会的に地位が高く経済的に豊かである人は、身なりや住まいもそれ相応に振舞うことが求められる。例えば一般的に金銭面で豊かであるはずの日本人が、タイを旅行する際に安宿に泊まったり薄汚れた格好で出歩いたりするのは、タイ人にとって理解しがたいのである。また、食事などをする際に経済力のあるほうが支払いをすることが多い。私もタイ人と一緒に出かけるとほとんどの会計を任されている雰囲気がある。国民の95パーセントが仏教に帰依しているタイでは、困窮する隣人に施しをする行為が仏教的な慈善の形態なのだ。タイの人々の、海外NGOからの援助に対して依存する体質がしばしば批判の対象として語られるが、こうした伝統的な社会意識が背景にあることを無視することはできない。

タイ政府はここ30年間で、主要産業を農業から製造業へと転換を試みてきた。1970年に農業の国内総生産額に占める比率は25.9%で製造業の比率は16.0%であったが、1981年にはこの割合は逆転し、製造業の占める比率が最も高くなった(表1)。

日本はタイにとって主要な輸出国であったため、日本でのバブル経済崩壊はタイ経済に直接的な打撃を与えた。国内有力企業との癒着によりタイ政府は通貨の切り下げを拒んできたが、1997年ついにヘッジファンドによる通貨危機に直面した。

タイは富裕層と貧困層の格差の大きい国である。タイは豊かになったとは言われるものの、富の配分の不平等が拡大しているのが現実である。特に、南部・中央平原とイサーンと呼ばれる北部・東北部での貧富の差は大きい。しかし、地域別所得格差(表2)をみると、家計収入の格差が大きいのは都市と農村地帯の間であり、特に東北部の貧しさは際立っている(萩原 1998)。北部に注目すると、1994年の年間家計収入(単位はバーツ)は都市部では154,044バーツなのに対し、村落部では64,944バーツと半分以下になっている。北部の村落地帯に住む人々は貧しさのために、出稼ぎ収入を求めてバンコクへと向かう。バンコク以外でも、サウ

ジアラビアや日本に出稼ぎに行くケースもある。

近年急激な成長を遂げたタイは、そのプロセスにおいて貧困問題を解決しないまま、貧富の格差、都市と農村の経済格差をそのままにしてきた(萩原 1998)という背景もタイの社会構造を知る上で重要である。タイの現在のこうした社会構造が、社会的弱者である山岳民族にのしかかり、貧困をまねく一因となっている。北部山岳民族は現金収入を求め、山を下り都市部へ流れ込むようになった。次の章では北部の都市チェンライとパヤオについて述べる。チェンライ県とパヤオ県には、日本からの援助金によって経営されている山岳民族支援施設がある。私がこの研究の調査地として選んだのはこれら二つの支援施設である。それぞれの支援施設があるチェンライ県とパヤオ県についてと、山岳少数民族とはどういった民族なのかを詳しく説明したい。

第二章 チェンライ県、パヤオ県、山岳少数民族について

第一節 チェンライ県の概要

タイ最北の県都であるチェンライ県の早朝は、熱帯であることを忘れるほど冷え込むことがある。人口はおよそ150万人である。ミャンマー・ラオスとの国境の接点である“ゴールドン・トライアングル(黄金の三角地帯)”は、かつてはアヘンの生産地として悪名を馳せていた。現在では多くのホテルや土産物屋が建ち並ぶ観光地となっている。また、チェンライ県は近隣の山に点在する山岳少数民族の村の訪問と、山でのトレッキングを組み合わせたネイチャーツアーの人气が高く、市内には山岳民族博物館がある。

大きな市場などには近隣の住民に混じり周辺の山岳民族などが買い物に訪れるなど、町と山岳民族との関わりも深い。昼の市場では、山岳民族が山で取れた筍やライチなどを、夜はナイトバザールで伝統的な民族の技術が生かされた装飾品などを売る姿がみられる。タイ北部であるこの地方は、農業と観光業以外の産業は発達しておらず、チェンマイについてバンコクへの出稼ぎ労働者が多い。出稼ぎ先の多くが男性は力仕事、女性は掃除婦やメイドなどのアルバイトのほかは性産業である。

北部出身者は南部出身者に比べると色白で美人が多いといわれ、北部出身者は売春婦として人気が高いのである。山岳民族との関わりが深いこのチェンライ県には、チェンライYMCAと熊本YMCAからの援助でつくられた「若竹寮」という山岳民族の支援施設がある。

第二節 パヤオ県の概要

パヤオ（パイヤオ）県は、チェンマイ市から北東に150キロメートルほどのチェンマイ県とチェンライ県の間位置する地域であり、現在タイの中で最も貧しい地方のひとつに挙げられる。1977年にチェンライ県南部が分離してできたこのパヤオ県には鉄道も通っておらず、チェンマイ市もしくはチェンライ市からのローカルバスで2時間ほどのところにある農村地帯である。国道もチェンマイ県とチェンライ県を結ぶ一本しかなく、ガイドブックにも紹介されていないため、まったくと言っていいほど観光地化されていない。そのため中心地にある商店に市場、国立病院、パヤオ湖、学校のほかは一帯が田園風景である。

このパヤオ県に、タイで精力的に活動する日本人NGO活動者、谷口巳三郎氏が経営する「21世紀農場」がある。

第三節 山岳少数民族の概要

日本からの援助の対象となるのは、主としてこの地域の山岳少数民族の人々である。この節ではタイ北部の山岳少数民族の概要についてふれておく。国境に程近いタイの北部地方には、約50万人の山岳少数民族が生活しているといわれている。人口の割合はカレン族が圧倒的に多く、次にモン（ミャオ、メオ）族・ラフ族・ヤオ族・アカ族・リス族と続き、少数ながらもフティン族・ルア族・カム族なども存在する。それぞれの民族は独自の言語を使用し、独自の刺繍やパッチワークなどの伝統技術を用いた民族衣装を持っている。以下、主要な山岳民族の特徴はチェンマイ大学少数民族研究所の資料と、ジョージナ・アシュワース編『世界の少数民族を知る事典』、地球の歩き方FRONTIER『タイ山岳民族をたずねて』などを参考に記載している。

主要な山岳民族の特長：カレン族・・・人口が最も多く、ミャンマーでのカレン民族迫害が激しくなった18

世紀頃からタイ北部に流入している。カレン族の多くはミャンマー東部のカレン州やカヤ州を中心に住み、約300万の人口を擁する。言語はチベット・ビルマ語派カレン語。ポー・カレン、スゴウ・カレン、プエ、トンスー、パネエサンスなどの支族に分けることができる。タイ国内にはポー・カレンとスゴウ・カレンが主にいる。比較的標高の低い所に定住し、象の調教をできる民族として知られている。また、伝統的にケシを栽培しないことや焼畑を行わない民族として知られ、タイ人と同化している村もある。民族衣装は女性の未婚者と既婚者で異なるのが特徴的である。未婚者は白地に赤線の入ったワンピース型の貫頭衣、既婚者は紺の上着に暖色系の巻きスカートのワンピースを着る。

モン族・・・カレン族に続いて人口が多い。中国国内では雲南省、四川省などに住む苗（ミャオ）族の支族である。タイ人の間では蔑称としてメオ族と呼ばれることもあるが、民族間では自称としてモン族を使用している。言語はミャオ・ヤオ諸語に属するモン語。タイ国内に住むモン族は、青モン族（モン・ユア）と白モン族（モン・ドー）に大別でき、民族衣装によって見分けることができる。頭脳明晰なうえ、戦闘的な民族として知られ1000年もの間中国と戦争を続け19世紀以降にミャンマー、ラオスを経てタイにやってきた。中国からケシの栽培技術をもたらし、その栽培技術は山岳少数民族随一といわれる。青モン族は刺繍やアップリケが施してあるひだ入りのスカートをはく。白モン族はスカートははかず、黒いズボンに刺繍を施した前垂れをかけ、冠婚葬祭などの特別な場合に大麻で編んだ白い無地のひだ入りスカートをはく。

アカ族・・・チェンライ県の国境地帯の高地に集中して住みついている。中国雲南省、ミャンマー北部、ラオス西北部にも広く分布し、現在もミャンマーから国境警備の手薄な山岳地帯をつたってタイ国内に移住してきている。言語はチベット・ビルマ語派イ語群に属する。タイ国内のアカ族は、ウ・ロ・アカ族、ロイミ・アカ族、ウ・ピャ・アカ族に分けられる。タバコが好きな

民族で、もとはチベットと中国南部に住んでいた。銀貨やボタン、羊毛を加工した帽子をかぶる。この重い帽子は就寝時さえも脱ぐことはない。最も精霊や悪霊の存在を恐れる民で、帽子を脱ぐと頭から悪霊が入ってくると信じられているからである。アカサパッと呼ばれる黒を基調とした布地の衣服にカラフルなすね当てを身につける。典型的なアニミズム信仰なので禁忌とされる事柄も多いとされる。

ラフ族・・・中国雲南省からビルマを経てタイへ移動してきた民族で、チベット東部または西南中国が起源といわれる。言語はチベット・ビルマ語派のイ語群に属するラフ語。他の山岳少数民族に比べて多くの支族に分かれていて、それぞれ文化や習慣が少しずつ異なる。山の精霊に近づくために山の斜面の高い所で生活。狩猟と焼畑による米、穀物、野菜、唐辛子などの他、現金収入のためにケシ栽培を行なうこともある。しかし近年、野生動物の減少により定住の農業を行なっている。各民族は独自の言語を使用する中で、ラフ語は他の民族間との交渉などで共通語として使用されている。

ヤオ族・・・中国南部から移動。四川省、湖南省、貴州省などを起源とし、漢民族からの圧迫によりベトナム・ラオス・ミャンマーなどを経てタイに移住してきた。言語はミャオ・ヤオ諸語に属するミエン語。漢字を使い、タイの山岳少数民族の中では唯一文字がある。宗教的にはアニミズムよりも道教の影響が強く、容貌も中国人と似ている。民族衣装は厚手の濃紺の上着に、細かい刺繍の入ったもんぺ風のズボンと頭には刺繍の入ったターバンをまきつける。他民族から養子を買う習慣があり、買われた子どもはヤオ族の子どもとして大切に育てられる。

リス族・・・中国雲南省、ミャンマー、ラオスにも広く分布。チベット東部を起源とし、ここ1～2世紀の間にミャンマーからタイへ移住してきた。言語はチベット・ビルマ語派イ語群に属する。背が高く、美男美女が多いとされる。山岳少数民族のなかで最も民族衣装が華やかで、頭にターバンを巻き、女性は虹色の上着を普段着として着る。

パダウン族・・・カレン族の支族で一般的には「首長族」として知られているが蔑称である。もとはミャンマーからの難民である。村の中で特に選ばれた少女が首に真鍮のコイルを巻き、25歳くらいまでに何度かコイルを換えながら首を伸ばしていく。現在は難民として弱い立場に置かれ、観光業で見世物的な生活を強いられている。

地理的分布（資料図1）：

1、〔カレン、ルア、カムー、フティン〕

低い丘陵と河谷上部に住む人々である。彼らは伝統的にケシの花の栽培をしない。循環栽培（輪作）の形式をとる。実行可能であれば、水田耕作を行う。タイ、ビルマ、ラオスに

隣接する地域に住む人々で自立した人々だと考えられている。安定した農業システムを持っているといえる。

2、〔モン、ヤオ、ラフ、リス、アカ〕

移動農耕を行ない、高地に住み、ケシの花を栽培する。より高い土地に住むのは、海拔1,000mの高原より上でないとケシの花はよく生育しないからである。20世紀に入ってビルマ、ラオスから移動してきた人々である。焼畑を行いながら移動する。ケシからの収入に対する依存度が高い。村の分散、解体はケシ栽培の共同体において頻繁である。

第四節 山岳少数民族を取り巻く状況
それでは、こうした山岳少数民族がなぜ現在経済的に苦しい立場に置かれているのだろうか。

山岳少数民族は20世紀にはいつから国境沿いでの紛争により、国境警備が手薄な山岳地帯を移動し、タイ国土

内に移住してきた民族である。また、もともと彼らは国境という概念とは無縁で、焼畑農業を行いながら移動生活をするうちにタイ国土内に入っていたとも言える。

山岳少数民族はタイ政府からタイ国民とは認められておらず、国籍を持たない人々である。タイではタイ国籍を所有するものにIDカードが発行されている。このIDカードはタイで生活する上で必要なものであり、IDカードを持っていなければ経済的に不利な扱いを受けてしまう。例えば、山を降りて町に移り住む際に車や家の購入をしようと思っても、IDカードによる身分証明がなされなければローンを組むことはできず、支払いが困難になる。したがって、町で生活する意思はあってもそれが困難なのである。

タイ政府は山岳少数民族に対してIDカードの発行をまったく認めていないというわけではない。タイ政府はいくつかの条件を満たせば、山岳少数民族がタイ国籍を取得することを認めている。その条件とは、町の病院で出生しているか、あるいは高等教育を修学することである。しかし、本来山で自給自足の生活をしてきた山岳民族にとって、どちらかの条件を満たすことすら困難である。なぜなら、町の病院で出産するに高等教育を受けるにも多額の現金が必要だからである。

以前の山岳少数民族は、現金収入のほとんどを麻薬の原料となるケシの栽培に頼っていた。しかしタイ政府は、1958年に全面的にケシ栽培を禁止した。同時に山岳民族が行なう伝統的農法である移動農耕（焼畑）が森林の劣化、土壌の流出を招き環境破壊の直接的な原因となっているとし、米・トウモロコシなどの焼畑農業も禁止した。さらに彼らの住んでいる土地がタイ国家のものであると主張し、山岳少数民族に政府の目の届く標高の低い土地まで降りてくるように命じた。このようにタイ政府は山岳少数民族の数、分布などを把握し、管理する政策を行なったのである。

しかし、山岳少数民族にとって焼畑農業を禁止されるということは、農業生産による現金収入を失うだけでなく、日々食べていく食料生産の道をも絶たれてしまうことを意味する。日々の食料を町で買うとなれば、現金収入のた

めの画策をしなくてはならなくなる。先に述べたように、ID問題や言葉の問題、山岳少数民族に対する一般タイ人の差別意識によって、町で一般的な職業に就くことは難しい。そこで山岳少数民族は現在でも危険な麻薬売買や、少女達の売春によって現金収入を得ざるをえない状況にある。

全面的にケシ栽培が禁止されて以来、ヘロインのかわりに覚せい剤の一種であるアンフェタミン（現地語でヤーヴァ、以下ヤーヴァ）が濫用されるようになった。ヤーヴァは単価も安く、中高生でも簡単に手に入るため麻薬常習者の低年齢化に拍車をかけている。ヤーヴァはおもにマンマーのタイ国境付近で作られ、タイ・マンマー・ラオスの三国の国境が接する有名な“ゴールデン・トライアングル”と呼ばれる地帯で取引されている。このときに仲介として山岳少数民族が関わっている。現在タイ麻薬取締局の取り締まりや罰則はかつてないほどに厳しく、売人は無期懲役や死刑判決を受けざるをえない。取引自体のトラブルも絶えず、リンチによる山岳少数民族の死者や行方不明者の話もしばしば耳にした。

売春に関しては北部山岳地帯の少女に的を絞った性産業ブローカーが数多く存在する。小学校を卒業したばかりの12,13歳の少女が家の貧しさによって言葉巧みに売られていく。性産業ブローカー達によってバンコクなどの大都市で売春に従事させられている少女（時には少年）たちが性病やエイズに感染させられ村に帰り、治療も受けられないまま死んでいくケースが後を絶たない。しかし、売春に関して言及しておかねばならないことは、タイでは売春は日本よりもはるかに身近な職業であるということである。一家の稼ぎ手として娘たちは町に働きにでているのであり、性産業に携わる彼女たちの何人かは胸を張って「私は体を売って実家の家を建て替えたんだ。父も母も私に感謝している。」と言っているのである。

もちろん不本意に売春を選んだ女性も大勢いる。麻薬も同様で日本での「特殊な限られた」イメージを持つ人間が麻薬の売人になるというわけではない。だからこそ普通の一家の父親が逮捕され、中高生も安易に麻薬常習者となりうるのだろう。これらは身近な出来事であり、売春や麻薬が身近にある環

境は日本人である私達には理解しがたい。現地では日本人が考えるほど売春は「かわいそう」な職業とは考えられておらず、彼ら自身の性産業への抵抗感の薄さかもしれない。それらの抵抗感の薄さが問題化した形で、性産業でのエイズ問題や従事する人間の低年齢化や、一家の稼ぎ手の逮捕による生活苦や、高校生や中学生の麻薬の常習が起こっているともいえる。

このように山岳少数民族を取り巻く状況にはさまざまな問題がある。IDを持たないために、町で暮らせない。子ども達を学校にもやれない。焼畑農業をすることができないため、日々の食料を買うための現金収入がますます必要になる。しかし、タイ語も分からないために雇ってくれるところもない。仕方なく麻薬の売買や少女の売春に手を出すわけである。それぞれの問題は複雑に関係しており、このような悪循環によって山岳少数民族は自分たちの置かれている状況から抜け出せなくなっているといえる。

後で、議論するが、こうした問題を考える上で両者が置かれている社会的状況、あるいは基盤となっている文化的な常識の違いについて留意しなくてはならない。日本に住む日本人の価値観からのみで援助される側を判断すると、そこから多くの誤解が生じるだろう。

第五節 山岳少数民族と宗教

海外からのNGO活動はキリスト教とも密接な関係にある。多くの援助は布教活動と同時に行われたという歴史があるからである。山岳少数民族は古来から精霊（ピー）を恐れ崇める精霊信仰（アニミズム）であった。精霊信仰は禁忌とされる物事が多く、特にアカ族の間では双生児は災いをもたらすとされ双生児が生まれると急いで森で殺さなくてはならなかった。双生児を生んだ夫婦は村から追い出され、その家は焼き払われた。村で誰かが危篤状態になっても、「今病人を動かしてはピーの怒りをかい、村に災いが起こる。」と町の病院に運ぶことを拒み、多くの助かるはずの命が失われた。しかし、数十年前からNGOによる衛生環境改善が行なわれるようになった。NGO活動はキリスト教の慈善活動によるものが多く、そのため村にキリスト教宣

教者たちが数多く入ってくるようになった。最初は宣教師やNGO活動者に対して閉鎖的な態度をとってきた山岳民族たちだったが、熱心な活動によりここ15年ほどでキリスト教に改宗する村が増え始めた。小さな村にも教会が建てられるようになり、双子を殺さなくても病人を町に運んでも精霊の怒りによる災いなど起きないことを教えられた。

私が訪れたアカ族のアツエ村は、村全体がキリスト教に改宗している村だった。アツエ村の人々は「キリスト教に改宗した自分には古いしきたり（精霊信仰）は関係ない」という言い方を盛んに使う。私が訪れたときにちょうど、若い夫婦が幼い子供を間に挟みバイクで町から戻ってきたところだった。子供が高熱を出したので、町の病院まで片道一時間かけて補正されてない土の道を往復したのだ。「村が精霊信仰のままであつたら子供は病院に連れていかれることも無く、今日あたり村で死んだらう。」と村長は言った。病院の薬を握り締め、まだ回復しないわが子を見つめる夫婦をみると、「犠牲の多い精霊信仰からより多くの命が救われるキリスト教」への改宗は、近代文明に触れた村の人々の自然な流れのように感じた。

しかしキリスト教に改宗した村のほうが犯罪率は高く、麻薬によるトラブルやHIV問題も多いという話もよく耳にした。キリスト教を媒介として人々は町と交流する機会が増え、それによって現金や生活必需品が村に大量に入っていった。さらに村の観光地化や伝統の民族衣装の商品化が進み、現金の移動は村内に貧富の差を生んだ。人々の、精霊の怒りをかうと死ぬという信仰によって保たれてきた村全体の秩序が、日曜日に教会に通うだけで許されてしまうキリスト教への改宗で乱れてしまったかのようだ。

山岳民族は政府によって農業を禁止され、町での現金収入によって生計をたてる必要性が出てきた。しかし、町で仕事を見つけるよりも政府も納得する形で農業の再開を目指す山岳民族の人々も少なくない。次の第三章で述べる「21世紀農場」は、そのような山村での農業再開を目指す山岳民族の若者とタイの農学校の青年を集め、日本から持ちこんだ有機農法による農業を教えている。日本人経営者谷口巴三郎

氏についてと、谷口氏が現地で抱える問題も一緒に述べていく。

第三章 21世紀農場

第一節 21世紀農場と谷口夫妻

飛行場も鉄道もない、ひたすら田園風景が広がるパヤオ県ジュン郡サクウ村に「21世紀農場」はある。経営者は日本人農学士、谷口巳三郎氏である。谷口氏はタイ国でNGOとしての様々なプロジェクトを行っている。内容は1、農村青少年教育 2、循環型有機農法による農場経営 3、奨学資金援助(里親活動) 4、少数高地民族(山岳民族)の農業指導・援助 5、H.I.V.エイズ患者の救済・援助 6、植樹促進 7、堆肥づくり推進などである。それらのプロジェクトすべての基盤が21世紀農場での活動にある。

21世紀農場の広さは25ヘクタールあり、そのうち水田2.5ヘクタール、果樹園8ヘクタール、竹林1ヘクタール、森1.5ヘクタールである。繁殖豚25頭前後に合鴨農法・食用のための合鴨が数百羽もあり、敷地内には淡水魚池も1ヘクタールほどある。そのほかに食堂や谷口氏の住居、グラウンド、スタッフ寮、学生寮、来客用の小屋などが点在する。

21世紀農場は農業及び職業のための訓練センターの役割を兼ねている。パヤオ県の農業指導高等学校から毎年20名ほどの学生を農場内の寮に預かり、9ヶ月農業教育を行なっている。2002年現在、農場には23名の男子高校生と農業指導スタッフ4名、学生の食事などの世話をする女性ワーカー4名、農作業を補助的に行なう男性ワーカー3名、そのほかに敷地内には山岳民族出身者や日本人などで自主的に農業を勉強しに来ている人々がいる。

21世紀農場は、学生から指導料や農場での生活費などを徴収しているわけではなく、スタッフや労働者には月給を支払っている。農場経営にかかる費用は年間1500万円にも及ぶ。その全額を日本からの支援に頼っており、実際に支援金を集めているのは日本にいる谷口氏の妻、恭子夫人である。谷口氏への奨学支援金の送金は、谷口氏が渡タイして以来の20年間で6000万円以上に達している。恭子夫人は自身が会長を務める「タイとの交流の会(谷口プロジェクト)」を設立し、谷口氏を応援している。また、恭子夫人はタ

イ国初のエイズセンターをパヤオに設立し、同じく初の女性センターを21世紀農場内に設立するなどして、積極的に活動の幅を広げている。農場の支援金は、額だけを考えると大変な数字であるが、農場内での谷口氏やスタッフの暮らしを見るとけっして贅沢はしておらず、建物や農作業に使う道具も立派なものを使っているというわけではない。「教育者であるには自らが農民でなくてはならない」と繰り返す谷口氏は一農民としてタイでプロジェクトを続けている。

第二節 谷口巳三郎氏の経歴

大正12年(1923年)に熊本県八代郡に生まれ現在78歳。タイに来るまでは熊本の農業改良普及員として県庁入りし、農業大学で教鞭をとった。しかし、農業を教えるならば自らが農業で生活をする農民となるべきではないだろうかと考え、昭和29年に30歳を過ぎてから菊地開拓地で理想とする農業を実践。こうして農民となってから4年が経った昭和33年、農業に行き詰まりを感じ新たな農業を勉強するために、国際農友会の派遣研修生として36歳で北欧デンマークへの1年間の単身留学を決意する。

帰国後再びもとの農業大学の職に復帰。同時期に福岡市西区にあるオイスカ(西日本研修センター)の会員となり、ボランティアで東南アジアからの農業研修生の受け入れを推奨、担当者として農業技術を教え始める。ここで第一期生であったヨハン・チェルマー氏に出会った。谷口氏は21世紀に起こると予測されている世界的な食糧難を危惧し、農民を育てる必要性を痛切に感じていた。定年間際に、生徒であったアジア青年達の強い希望により、自分自身がアジアに渡り現地で農業教育を行なうことを決意する。バングラディシュとタイが指導候補地として選ばれ、現地視察の結果日本と土地の条件が近いタイに決定された。

昭和57年、58歳で熊本県立農業大学校を定年退職した後、日本で谷口プロジェクトの支援者を集めることと協力をしていくこととなった谷口婦人を残し単身タイへ赴いた。最初にはチェンライで8年、その後点々としながら現地の農業青年に生産の向上と化学肥料を用いない農法を教え、各地で農業の収

効率を上げるなど数々の功績を上げた。

平成2年、現在のパヤオ県に21世紀農場を移転（7回目）。平成7年に日本外務大臣表彰を受ける。翌年の平成8年、21世紀農場が法人化され、「財団法人・農業及び職業訓練センター」となる。平成10年、タイ国立メ・ジョ大学より「名誉博士号」を授与。国立パヤオ農高生の教育を一任され、新プロジェクトを開始している。

第三節 農場に勉強に来ている山岳民族の青年

農場には山岳民族の青年数人が谷口氏の農場に滞在し、循環型有機農業を学びに来ている。有機農法を学ぶ理由は、政府が山岳民族の農業を禁止している理由の一つに「化学肥料を使用し、下流の一般タイ人の農地に悪影響を及ぼしている」ことがあるからである。彼らは焼畑でも化学肥料を使った常畑農業でもない環境に優しい新しい農法を村に伝え、政府がもう一度山岳民族の農業を許可してくれることを目標にしている。山地の村で農業が再開されれば、山岳民族は自活でき、現金収入のための危険な商売を止めることができるかと信じている。

農場に滞在する29歳のカレン族の青年は言う。「私は将来農民になり、村に帰って農業をやりたい。町は疲れるし、お金がたくさん必要だ。友人でチェンマイ大学の農学部を出たのに町で仕事をしているやつも知っているけどね。でも私は早く村に帰りたいよ。村で何をやればいいのか、農業に関する問題が村には山積みだ。牛も飼いたいな。さしあたり20頭あればとてもいい。田んぼも作るよ。果樹園もいいね。ここではもう2年間農業を勉強しているが、村ではここの有機農業（化学薬品を使用しない）のみでやってみたいんだ。今、現金が入ってきたせいで少しずつだがやはり村内でも貧富の差がある。村はアニズムだが、私はクリスチャンに目覚めた。2年前に洗礼を受け、改宗したんだ。でもこの農場から教会までは40キロも歩かななくてはならない。それは無理だから、日曜は自分でお祈りをしているよ。自分が村に持っている土地もまだ国から借りている状態なんだ。だからいつ政府の都合で取り上げられるかわからない。山岳民族はそういう不安定な借り物の土地に囲まれ

て生活している。そんな所に住む山岳民族達の不安は大きい。でも、ケミカル（化学）の肥料を使わないで農業をやれば、政府から嫌われることもなくなり、山から立ち退きを迫られずに済むかもしれないんだ。」

山岳民族は常に政府から監視されている。標高の高い、政府の目の届かないところで勝手に焼畑や化学薬品を使った農業を行なえないように、繰り返し立ち退きを命じられ徐々に標高が低く町に近い所まで下ろされている村もある。しかし、山岳民族は焼畑による移動農耕によって作物を育てるより他の方法を知らない。焼畑に代わる農業として、有機農業を学ぼうとする山岳民族の青年たちを無償どころか給料を与え、農場に受け入れることで谷口氏は彼らの自立への道を応援する。

第四節 谷口氏の哲学

なぜこれほどまでに身を削る思いで支援を続けるのか。それは谷口氏が敬虔なクリスチャンである要因が大きい。しかし一般的な私が出会ってきたクリスチャンとは違い、谷口氏は「神のために」と言うよりは「自分自身が信ずる哲学のために」といったほうがよい。谷口氏の哲学を思わせる発言をいくつか紹介しておく。

「自分：困っている人 = 50 : 50になるまでは援助をする。自分の痛みなくしては援助はありえない。自分にも貧困があったから援助できる。『金持ちの大判振る舞い』では、“愛”がない。“愛”とは永続性があるものだ。」

「金と設備があれば教育ができるというわけでもない。建物を建てて、机を用意して、本が何冊必要で・・・ではない。自分はこれ以上この農場の設備や建物を新しく、近代的にするつもりはない。教育に必要なものは真の教育者だ。」

「町に出たら、必ずゴミを捨てることを決めている。5個から10個、時には20個捨てる。なんと道にはゴミが多いことか。本来物があるべき場所に無く、無くべき場所に雑然とあるとき犯罪は増える。犯罪が多い場所ほど落書きやゴミが散在しているだろう。人のいる場所に散らかるゴミを捨てることは、自分の心の中の汚いものを拾い上げ、きれいにするのと同じである。」

「自分に嘘をつくことは絶対にしたく

ないものだ。」

「死ぬとき、これ以上他人のために尽くすことができなかつた、と云いたい。」

谷口氏の支援のあり方は、与えることによりできる心のゆとりを目的としている。谷口氏はこう語る。「例えば何キ口も竹筒を持って川まで往復し、明日をどうやって生きようとするか、とだけで毎日が終わっていくような山岳民族の村に水道を引く。そうすることで生活に時間的、精神的なゆとりを持たせることができたとしたら、山岳民族たちは自分達の頭で自立や教育への考えを導き出せるのではないかと。与えるだけになりがちな現在の支援のあり方。しかし与えるだけでは自立にはつながらない。」自発的に考える余裕を持たせることが、谷口氏の支援の目的である。しかし20年の歳月を費やしてもまだ、支援慣れしつつある山岳民族たちを目の当たりにするたびに谷口氏は協力、援助というものの難しさに悩まされる。

第五節 谷口氏の苦悩

谷口氏は戦前の厳しい教育観を思わせる、規律を重んじる人物である。21世紀農場はただ若者に日本の発達した農業を教える学校ではなく、集団生活をすることによって子供たちの人格形成にも良い影響力を持たせたいと考えている。食堂に谷口氏の教育方針を掲げた農場のローガンが掲げられている。

『私は家族の希望の星 私達は国の宝
そして我々は人類の食料を生産する戦士である』

『希望があれば瞳は輝く 希望は自ら作るもの
今、君の瞳は輝いているか』

この2つのローガンは食堂にあるタイ国王の肖像の両脇に掲げられ、日タイ語両方の言葉で書かれてある。ローガンは生徒達が農作業中に着るユニフォームにもプリントされ、農場の学生たちはローガンをタイ語で完璧に暗記している。

農場では生徒は朝5時に起床し、掛け声でジョギングを行なう。7時15分には朝食を知らせる“ドラ”の音が響き、食堂に上がる時生徒は忘れずに靴をそろえねばならない。「おはようございます」「いただきます」と日本語で号令がかけられると生徒は大声で復唱

する。食器の後片付けの際は各自食器を洗うのだが、適当に水で流すだけで済まそうとする学生が多いので互いに見せ合い「ココがまだ洗い方が甘い！」とチェックし笑いあうのが毎日の光景だ。8時からの農作業に入る前は毎日必ず朝礼 タイ国家斉唱 国旗掲揚が行なわれる。日本の林間学校での風景とよく似ている。しかしここはタイである。一般的にタイでは集団での規律はあまり重要視されていない。約束した集合時間に集まることはほとんどあり得ず、食事は家族間でも各自食べたいときに勝手に済ませることが多い。小学校前には児童の下校にあわせて小学生向けの屋台が建ち並び、子ども達は軽い食事を済ませる。集団で食べる時も注文したものがきた順に食べ、食べ終えたらバラバラに解散していく。特別にルーズなのではない。これがタイでは一般的な習慣なのである。だからこの21世紀農場での規律はタイ人と比べて大変厳しいと推測できるが、学生やスタッフたちはたまには谷口氏に叱責されながらも規律を守っている。

しかし谷口氏は長い間この規律を守らせることがどれほどの意味を持つのか計りかねていると言っている。「元来高校生の教養レベルが日本とは全く違うので、日本で教えていた時に比べ教える方も時間のかけ方も試考錯誤してきた。教育者である自分の意図する方向に教育を受けるタイの若者がどれだけ沿うのか。それは人格形成に役に立っているのか…。違った文化を持つ教育者、被教育者という関係でどちらの文化形式に乗っ取って学ばせたらいいのか。現在は規律を日本風に与え、靴を揃えさせ、いただきますと号令をかけさせることにタイの若者にとってどれほどの意味があるのか。もともと規律など必要としない社会で育っているのだから守れないのはなんの不思議でもない。社会の価値観の問題である。私は異国の地での教育者として自問自答する日々を暮らしているのだよ。」と、谷口氏は悲しげな顔をする。「ある日、タイの農民たちが手のひら一杯程度のしか運べない道具で何度も肥料を運んでいるのを見た。そこで私はザルを持ってきてこれを使えばたくさん運べることを教えた。はじめのうち、これは便利だと言っていたが数日経つとザルを使ってたくさん運ぶことはしなくな

る。せっかく教えても教えられる側が必要を自ら感じなければただの押し付けになってしまう。いつまでも雇われ精神、学生精神が抜けないから成長もしないし自分たちの力で立ちあがることもしない。」第一線で支援の現場に立つ人間ならではの悩みがある。

谷口氏を苦悩させる問題に後継者がいないという事実がある。谷口氏は78歳と高齢であるうえに、結核を患っていて、6畳ほどの自室には大きな2つの酸素ボンベがある。今後もしも谷口氏の体調不良により農場を続けられなくなった場合、後継者となる人物はいない。農場内のことはすでにシステムが確立されつつあるから大丈夫だとしても、問題はスタッフの生活を支える給料などの資金面である。スタッフには家族を養うという義務がある。現実的に考えて、別の安定した仕事に移らせたほうが、スタッフにとってはいいのではないかと谷口氏は考えている。タイの人間では年間1500万円もの資金を集めるのは困難なため、後継者となる日本人を育てようとしたが、若者はみんな地味な農業よりも華やかな町へと流れていってしまうという。「人の好意にすがって、不安定な先の見通しのきかないプロジェクトを行ないつづける私は、乞食と変わりはない。」と谷口氏は言う。21世紀農場は知名度があるため、年間およそ100人以上の日本人が見学を訪れはするが、表面的な興味までにとどまり、谷口氏の目から見て後継者に値する人物は現れないそうだ。

タイ人高校生に農業指導するスタッフをはじめとして、農場には自主的に学びにきた山岳民族の青年たちがいる。谷口氏は額こそ少ないが給料を彼らにも与え、熱心に指導している。しかし、谷口氏自身の考えでは山岳民族が山で農業を続けることは不可能ではないかと感じている。山に帰っても生活の手段が無く、貧困にあえぐばかりである。それならばいっそタイ語を学び、山を降りて町に溶け込んでいったほうが生活はしやすい。「外の間人は『山岳民族特有の文化を村に帰って守るべきである。』と言う。しかし文化を守れとは、第三者が現状を把握せずに言う無責任な発言である。暴言である。文化とは必要に応じて生まれたもの。民族が生きるために不便になったのなら廃

れていって当然である。」谷口氏は、村を盛り返そうと瞳を輝かせるカレン族の青年には決して言えない自らの考えを私に語った。谷口氏はツアー用に見世物として存在する数多い山岳民族の村のあり方にも批判的である。「自分たちが当の昔に失ってしまった100年以上も前の生活を山岳民族の村の中に見て、懐かしみ保護しようとするのは『たまに見に來たいから、動物園のサル山のサル役をやってくれ』と言っているのと同じで、近代文明に生きる我々側のエゴなのかもしれない。」

日本人支援者を通じて山岳民族支援を続ける谷口氏は、支援者でありながらも直接経営に携わっている。しかし、次の章で述べる「若竹寮」の経営者であるヨハン・チェルマー氏は、支援される側でありながら経営者として施設を直接運営している代表ともいえるだろう。

第四章 若竹寮

第一節 若竹寮運営方針

続いて二つ目の支援施設である「若竹寮」の事例を見ていくことにする。

チェンライ市街地から西に車で20分ほどのところにあるナムラト村に、「若竹寮」という日本名の施設がある。この施設は日本人の里親制度による支援と、チェンライY M C A・熊本Y M C Aによる援助金で9年前の1993年から経営されている。若竹寮の経営者はヨハン・チェルマー氏という山岳民族アカ族出身の青年である。ヨハンはこの若竹寮以外に富士山寮（7年目）、メコン寮（8年目）という施設も経営している。山岳民族で小学生から高校、大学生くらいまでの子供たちを村々から選び、学校のある市街地に程近い若竹寮で共同生活させながら支援金で教育を行なっている。また、ヨハンの妻であるミソーさんは若竹寮の近くでニューライフ・センターという寮も備えた施設をつくっている。そこでは虐待を受けていたり、未成年でありながら性産業に売られ、保護された少女なども含めた50名ほどの女性に、ミシンなどを使った手工芸品の指導などを行なっている。このニューライフ・センターは少女達にタイ語を教え、新しい職につけるようになるための更正施設としても一役買っている。

若竹寮の目的は1、貧しい家庭、親のいない家族の子供たちに学業の機会を与える。2、山岳民族の身内のいない子供たちに対し、学費の援助や学業期間中の安全な宿泊施設を提供する。3、保護、管理、愛情、暖かさの寮生活を通じ、学生の就業意欲を喚起するとともに、予期社会人となるべくその人格形成に努める。4、一般タイ人や他民族、外国人などとの友好的な交友関係を培う。5、子供たちの自由な思力、発言力を養うとともに、地域リーダーとしての知識や模範的な行動力や他人との共同生活を養う。6、学生自身の良き文化、伝統を後輩、後進に保持、伝達していく。

里親制度のシステムについては、費用は小・中学生55,000円、高校生以上65,000円で1年分の教育費、生活費、寮運営管理費などの現地費用と、YMCA会費、事務通信費が含まれている。支援期間は一年間をめやすとし、毎年3月に支援継続の確認を行う。一年で支援を止める人もいるが、たいていは継続して同じ子供の里親となることがほとんどである。その子が勉強をもっとしたいと言え、最終学歴までずっと継続して里親となることも少なくない。子供たちの教育や寮の運営については里親はヨハン氏に一任しており、里親は随時子供たちからの手紙を受け取ることができる。ヨハンは月に1回、チェンライYMCAに若竹寮運営報告を行なう。また年に4回、子供たちの様子を知らせる新聞『わかたけ寮通信』も郵送されるが、お小遣いや物品のプレゼントは教育上好ましくないため送ることはできない。(熊本YMCAの資料により抜粋)

寮生は女子が圧倒的に多い。山岳民族に限らず、教育を受けることができなかつた貧しいタイ家庭の少女が就職できるのは、必然的に性産業になる場合が多い。そういった職業選択の幅が狭い女子をより多く生徒として育て、ホワイトカラーの職に就かせてやりたいというヨハンの考えが寮生の男女比に反映されている。また、女子の方が比較的まじめに勉強に取り組むとヨハンは言う。ヨハンが寮生活にこだわるのは麻薬(ヤ-ヴァ)のこともある。現在タイでは高校生早ければ中学生くらいから麻薬の問題に巻き込まれる。そういったトラブル回避のために寮生

活と厳しい規律がある。寮の運営資金はほとんどが里親と熊本YMCAからの支援金であるが、ヨハンは生徒の本当の親である山岳民族の両親からも生徒ひとりにつき年間2000B負担させている。2000Bというと日本円にすれば6000~7000円くらいだが、タイでは一般的な女子事務員の初任給くらいの額である。ましてや現金収入の少ない山岳民族ではかなりの高額といえる。もちろん片親であったり孤児であったりした場合は無料で入寮させている。しかし学ばせる親、学ぶ子ども達自身にも責任と意欲を持ちつづけさせるためにも、負担させているのだという。ヨハンは山岳民族は支援に対してすぐに甘えるところがあると、支援慣れに対して危機感を感じているのが印象的であった。

第二節 若竹寮の子供たち

私は以前から若竹寮を知っていてフィールドのテーマに選んだわけではなない。私がどうやって若竹寮にたどり着いたかを説明する。私ははじめ、北部では最大の都市チェンマイにいたが、テーマと調査地がなかなか絞れずじまつた。そんなときに現地で知り合った在タイ日本人の男性が「チェンライに日本人も関わっている面白い寮がある」とわざわざ車でつれて行ってくれたのがきっかけである。このように親切な出来事は旅先ではけっこうあることなのだが、わざわざ車を5時間も走らせてくれ、そのうえ寮の代表者であるヨハン氏に滞在の許可まで取ってくれたのは本当に運がよかったとしか言いようがない。そういうわけで、私は若竹寮の予期せぬ来訪者になった。この突然の日本人一人旅の女学生を子供たちは大歓迎してくれた。ボランティアでもなく、支援者という立場でもない、しかも年が近い私はなんなく彼らの中に入っていた。子供たちは私を「ピユウキー(ユウキお姉さん)」と親しげに呼び、私が使わせてもらっていた寮の角の小部屋に遊びに来ては私が持ち歩いてきた日タイ語辞典を奪い合つて片言の会話を楽しんだ。

若竹寮に着いて最初の日のことだった。数人の子ども達が何度も「ユウキーは“ユウキッ”なの? “ユウキー”なの?」と訊いてきた。「キッでもなく、キーでもなく、“キ”だよ。間の長さだよ。」と何度言っても分か

らない様子で、私もどうしてそんな細かい所にこだわるのかわからなかった。しばらくして年長のヴィという女の子が紙に《 YUKY OR YUKT 》と書いて持ってきた。私はようやく小さい子ども達は何を言いたかったのか分かった。小さい子ども達はタイ語自体がまだ習いたてなうえに、ローマ字表記はよく理解できていない。タイ語では「k y (キー)」や「k t (キット)」はあっても「k i (キ)」という間の発音はわからないのだ。習いたてのタイ語で私の名前を書こうとして、「k y」なのか「k t」なのか確認したかったのだ。子ども達の勉強に対する姿勢は大変前向きで、私も片言ながら多くのタイ語を学ぶことができた。子供たちは競って「日本のお父さん、お母さん」からの手紙や写真を見せてくれ、「この日本語はタイ語で言えばなんと言う意味なのか」「自分の里親が住んでいるところにピィ ユウキーは行ったことがあるか」などと聞かれた。ただ子どもによって頻りに手紙をくれる里親と、里子にあまり興味を示していない里親の差があるように感じた。

寮の2階は年下の子供たちが自分で布団を上げ下ろしをして生活し、1階は年上の子供たちが隣同士で手が繋げるほどの狭い間隔でベッドを並べて生活をしている。ベッドには一つ一つに蚊帳がつけられ、暇ができるとすすんで自分の民族の手工芸である刺繍を行なっている。これは、民族独自の文化保持と手工芸品が売れたときの利益との両方の利点がある。熊本 Y M C A では、このこどもたちが施した刺繍要りの携帯電話ケースを日本で500円で販売していて、売上は現地に還元している。これらの刺繍製品は、将来種類を増やし、委託販売も考えているという。子供たちの自分の城であるベッド周辺には、村の家族の写真や今夢中になっているアイドルの写真やポスター(タイでは日本のジャニーズや深田恭子が大人気)が貼ってある。

男子とは別棟になっているため、女子の寮室内しか見ることができなかったが、建物自体は古くなっているとはいえしっかりとした作りである。年頃の女の子らしく鏡が数箇所欲しいのか、一枚の大きな鏡をいくつかに割って利用していた。食事の準備や水浴びの順番が当分来ない子ども達はサッ

カーやバレーやゴムとびなどをして運動する。日本の子ども達と明らかに違うところは同じスポーツに男女混ざって参加するところだろうか。私はサッカーはしたことがなく、「へたくそだ」と年下の子ども達にもよく笑われた。

若竹寮で一番困ったことは入浴だった。入浴といってもたらいに貯めた水を浴びるだけなのだが、今まで滞在した所はシャワーがあったり、水浴びの場所があるうじて壁で仕切られていたりしていた。しかし若竹寮では洗濯場が水浴び場としても利用されていたので丸見えである。寮生たちは皆“パトゥン”と呼ばれる大きな布を体に巻いて上手に水を浴びている。体を隠すものを持っていない私は仕方なくトイレにたらいを持ち込み、立つとドアの隙間から見えてしまうのでしゃがんでの水浴びになった。チェンライは最北の都市であり、バンコクから長袖のファッションを楽しみたい人が避暑地として訪れるような町である。雨季であるこの時期の水浴びは大変寒い。

次の節では里親と子ども達のすれ違いの事例として、手紙のやり取りを取り上げる。

第三節 里親への手紙

年に2回ほど子ども達は日本の里親に手紙を書く。勿論子ども達はタイ語で書くので、ヨハンが子ども達の手紙を日本語に訳している。ヨハンの手で日本語に直したものと一緒に子ども達の絵などを同封して送られる。しかし、ヨハンも日本語はローマ字記述しかできないので、私が若竹寮に滞在する間は私が手紙の代筆作業をするようになった。私がタイ語を読めないので、まずヨハンが子ども達の直筆文を日本語に訳してから私が日本人にも分かりやすい文章にして日本語で清書するという代筆作業である。子ども達の文章は始まり方から終わり方までほぼ一緒で、ヨハンはそのような書き方が日本的でマナーが良いと思っているのであろう。どの手紙も「日本のお父さんお母さん、こんにちは。」で始まり、次に「お元気ですか。」と来る。そして「夏休みは町にアルバイトに行った」話か、「夏休みは村に帰り、両親の仕事を手伝った」話になる。続いて「そのアルバイトが辛かったが頑張った。もっと将来は良い仕事につけるよう

今以上に勉強する。」と続くか、あるいは「村で作った農作物を売りにいったが高くは売れなかった」話や「村でこういう不幸なことが起きた」話になり、唐突に「それではお元気で。」と終わる手紙がほとんどなのである。子どもの手紙を何例か挙げたい。

子供の手紙1: 『お父さん、お母さんこんにちは。お元気ですか。私は元気です。5年間大変ありがとうございます。今年は専門学校3年になりました。3月と4月の夏休みにチェンマイに行ってアルバイトをしました。マンションの1階から5階までの掃除のアルバイトです。朝6時から働いて、寝るのは夜中くらいです。もっといい仕事ができるように、もっと勉強して、上の短大に行きたいです。お元気で。』

子供の手紙2: 『お父さん、お母さんこんにちは。私は元気です。5年間大変ありがとうございます。今年は専門学校3年になりました。私の家族は色々はまだ問題があります。お母さんの体調がよくありません。去年、私のお父さんが麻薬の売買で捕まり、裁判所から25年の刑期を言い渡されました。残念です。3月と4月の夏休みに、バンコクにアルバイトに行きました。家政婦の仕事です。お金をもらいました。このお金は今年の勉強のために使います。お元気で過ごしてください。』

ヨハンは「里親にもよるが、悪いことでも現状として手紙に書いて欲しい、と言われていたので」と言った。

すこしバリエーションに富んだ子どもの手紙はこうなる。

子供の手紙3: 『お父さん、お母さんこんにちは。5年間大変ありがとうございます。私は学校のサッカーチーム代表として、チェンライ県の高校生サッカー大会で2位になりました。とてもうれしかったです。夏休みは両親の手伝いをしました。果物のライチを採って売りましたが、今年は豊作で値段が下がり、安くしか売れません。私は果物を売るのは初めてで、1キロ当たり2パーツから3パーツ(6円から9円)でしか売れませんでした。機会があったら、一度日本を訪れてみたいです。お父さん、お母さんも、暇がありましたらぜひ来

てください。お元気で。』

いい事にしる悪いことにしる、一番強く印象に残ったことを手紙に書くようだ。しかし、どうして判で押したような同じ手紙の書き方をするのか疑問に思った。もともとほとんどの民族が文字を持っておらず、手紙の形式など知らないほうが普通である。ヨハンが最初に「手紙とはこのように書きます」と教えたのを、忠実に守って書いているのだろう。日本での「拝啓・敬具」と同じである。里親としては中学生や高校生になっても一向に文章表現力がなく、パターンも変わらないことに対し不満があるようだ。しかし、本来日本の同世代の子ども達と比較することは間違っている。教養をスタートする年齢も遅く、レベルも日本よりも低いからである。里親はこのような教養レベルの違いを含めて大きなスタンスで子ども達を見守っていかなくてはならない。

第四節 ヨハンについて

続いて、この寮の運営を行なっているヨハン・チェルマー氏の生活について記述しておく。

ヨハン夫婦の住居は若竹寮の同じ敷地にある。寮自体の建物よりも現代風のつくりになっており、2階の部屋はアルミサッシの窓、シャワーや便座つきのトイレも兼ねそろえている。大きなソファに電子ピアノもあり、部屋中に写真や表彰状などが飾られてある。食事も寮生とは別々に夫婦で食べているようなので、何を食べているかは知ることができなかった。若竹寮に来る前に、21世紀農場での谷口氏の「生徒と共にある」生活ぶりを見てきただけに、私はヨハンの生活レベルの高さに戸惑った。

若竹寮に滞在して3日目の朝、ヨハンから午前中の礼拝の後、メーサーイのほうに行くので一緒に来ないかと誘われた。メーサーイとは、チェンライ市の更に北に位置するミャンマーとの国境にあたる街だ。両国の関係悪化により、現在では厳しい警備の元にミャンマー側への通行はできないと聞いていた。ヨハンがメーサーイに何の用事があるのかも分からないまま、私はヨハンのトラックの荷台に乗りこんだ。ヨハンは途中で数人のタイ人や日本人、

山岳民族の人と合流し、最終的に荷台には11人も人間が乗っていた。

トラックはメーサーイの郊外の住宅地に着いた。その家は若竹寮の卒業生が嫁いだ先で、その元教え子の生後3ヶ月で死んだ子どものお葬式が執り行われていた。途中で合流した日本人の方の父親が、里親であったそう。元教え子は、ヨハンの訪問を喜んだ様子で気丈に振舞い、ヨハンは死んだ子どもの写真を何度も手に取り、もと教え子に話し掛けていた。その後、葬式に集まっていた親族の子ども達も連れて、私たちはメーサーイの国境のある地帯に向かった。国境が見渡せる展望台まで私を連れて行き、ヨハンは山々を指差して言った。「あの山頂に2本の旗が立っている。タイとミャンマーの旗だ。あの旗付近では今でも紛争がたびたび起こり、多くの山岳民族が巻き込まれ村に被害が出る。若竹寮の生徒の中にもあの付近に村を持っている子どもがいる。家族が砲弾で死に、村の移動が頻繁だ。家族が死んだ生徒はかわいそう。」

ヨハンは毎週土曜日に若竹寮の生徒たちを連れ、農作業に出る。若竹寮を訪れてくれる里親も宿泊できるゲスト・ハウスを建設中なのだが、その周囲を田んぼと果樹園にしようと計画なのだ。建物の周辺はまだ雑草だらけの空き地で、ここが収穫できるほどの果樹園になるのはまだまだ先になりそう。石を運ぶにも、土を馴らすにも大声で歌う生徒たちにヨハンは苦笑してこう言う。「特に女の子たちがうるさいほど歌うんです。どこの国も一緒でしょう。」ヨハン夫婦には子どもがいなかったためか、若竹寮の生徒に対して父親のようでもあり、学校の先生のようにもある。

ヨハンは山岳民族支援プロジェクトを行なっている人物としてタイ国内でも有名人である。そのせいか若竹寮以外でのヨハンの評判を聞く機会があった。ゲストハウスなどを経営しているある在タイ日本人はヨハンの事を「支援金で普通の人よりもいい生活をしているとんでもないやつだ」と罵った。若竹寮の子ども達にヨハンはどういう人物か尋ねてみた。「怖いときもあるけれど親切で私達の面倒を良くみってくれる。」「厳しいけど、立派な人。尊敬している。」と、口々に言う。ヨハ

ンは山岳民族としての成功者でもあり、生徒達の目標でもあるのだ。私は滞在中にヨハンという人物像について、日本人側からとタイ人や山岳民族たち側からの印象に大きなギャップを感じた。日本人側はヨハンの生活水準の高さを、「日本人の好意を食い物にしている」と認識し、ヨハンのこれまでの功績よりもヨハンの一見“贅沢”とも映る豊かな生活ばかりに注目してしまう。逆に若竹寮の子ども達はたとえヨハンが自分達とは違う生活水準で暮らしていても「成功者としての当然の振る舞い」と認識し、これまでの功績による“賜物”で、目標としての励みとなっている。このような日本人側、タイ側の両極端とも思える認識の違いは現地生活してみても大きな発見であった。

以上が援助される側の事例である。こうした援助に対し、日本側の支援の窓口である熊本YMCAの対応はどうか。次の章は、支援する日本人里親と山岳民族の子供たちを結びつける接点である熊本YMCAについて取り上げ、里親制度のどのような点を問題として捉えているのかを考えたい。

第五章 熊本YMCAについて

第一節 熊本YMCAの始まりと使命

YMCAは、Young Men's Christian Associationの略で、キリスト教青年会を意味する。現在、122を越える国々で組織され、熊本にYMCAが設立されたのは、1948年という戦後間もない頃であった。現在では熊本市内10箇所の施設があり、様々な青少年運動の拠点となっている。その運動は語学教育、健康教育、職能教育といった運動をはじめ、国際交流やボランティア活動についての多種多様なプログラムを提供するなど、幅広い活動を地域に広めている。また、熊本YMCAは次のような使命により運営されている。

- 1、 共に生きる社会 人の痛みを感じ、互いに分かち合い、共に生きる社会の実現に努めます。
- 2、 地球環境の保全 人と自然がともに生きていける地球環境を大切にします。
- 3、 生涯学習の推進 すべての人々が、出会いを通していつも学びながら成長できる場と機会を提供します。

- 4、 ウェルネス活動 生涯にわたり心とからだの健康をつくり保持する活動を展開します。
 - 5、 ボランティア活動 地域や国際社会に貢献できるリーダーを育成し、ボランティア運動の輪をひろげます。
 - 6、 平和な世界 アジアの一員としてその歴史に学びつつ、世界の人々とともに平和で豊かな世界の形成に努めます。
- (熊本Y M C Aの紹介資料から一部抜粋)

第二節 里親制度の意義と現地との距離感

里親制度は2003年で10周年を迎える。これまでの活動に区切りをつけるためにも来年里親たちを集め、大規模な式典を催す予定にしている。しかし何をもって里親制度の成果とするのか。子供たちがIDカードを手にし、国籍を持つことか、それとも町で安全な仕事に就きタイ人と同化することか。村に帰り山岳少数民族の権利確立のための指導者になることか。そもそも、国際交流としての活動であり、成果自体を具体的な指標として求めてもよいものか。これまでの、10年という教育里親支援のあり方について考える時がきていると、Y M C Aの教育里親紹介の担当のスタッフは語った。

現地支援スタッフは現在居らず、若竹寮の情報はヨハンからの年4回の「若竹通信」からと、毎年4月に予算や運営についての話し合いのための渡タイが主となっている。寮の建物がどれほど老朽化しているか、増築が必要であるか、子ども達が日常的に必要なと思っているのは何かなど、すべてはヨハンからの申し出と、チェンライY M C Aの判断によって寮は運営されている。

里親側からの若竹寮に対する不満もある。まずは里子からの手紙である。里子の成長を知るには年に2回という回数は問題ないとしても、もっと手紙のやり取りの頻度を増やしコミュニケーションを取りたがる里親もいる。手紙の内容に関してもしっかり、毎回同じパターンの手紙では新鮮さがなく、里親側が手紙の内容までヨハンが管理しているのではといった疑いすら持ちかねない。毎回勉強のこと、村のこと、休み中のアルバイトのことだけでは子

どもらしい情報がない、というのである。今どんな遊びが子ども達の間で流行しているのか、どんな歌手やアイドルが好きなのか、気になる異性はいないのかなど、里親は年頃の子どもらしい、生のリアリティあふれる情報のやり取りを求めている。

考察

文化を超えて人と人との関係を築いていかななくてはならない国際支援には、様々な問題がある。これまで述べてきた二つの支援施設の事例をもとに、21世紀農場は支援する側が直接運営するプロジェクトとして、若竹寮は被支援者側が直接経営するプロジェクトとして考察してみる。

第三章で見たとおり、21世紀農場の谷口氏はパヤオでは名前を知らない人はいないというほど、有名な日本人NGO活動者である。しかし本人に奢った様子はまったく感じられず、現地での生活は日本人が言う所の「清貧」そのもののように思える。「自分は支援金で生活しているのだから物乞いと何ら変わりはない」と言い切る谷口氏は、自己犠牲と博愛の精神で自らの信ずる支援のあり方を模索し続けている。日本でも「タイとの交流の会(谷口プロジェクトを応援する会)」が発足するなど、谷口氏の日本人支援者からの信望は厚い。谷口氏は日本人の目から見て“理想的な支援施設経営者”であり、人格者である。平成7年には日本外務大臣表彰をうけるなど、国からも功績を認められ、日本のTV局の取材も受けた経験がある。しかし、谷口氏は立派な行いをしているにもかかわらず、タイ人の生徒とのコミュニケーション不足や文化の違いからのスタッフの不理解に悩まされ、現地で後継者が見つからないまま不安な日々を送っている。谷口氏が高齢により、プロジェクトを続けることが困難になった場合21世紀農場はどうなるのか。先の見とおしのない支援ははたして成功と言えるのであろうか。

第四章で見たように、若竹寮のヨハン・チェルマー氏は、日本からの支援金により山岳民族支援の寮を運営しており、ヨハン自身も山岳民族出身である。寮の経営自体は非常にうまくいっており、毎年多くの子ども達が修学後、希望どおりの職業につく事ができてい

る。しかし、在タイ日本人の人々の中にはヨハンの支援金による豊かな生活ぶりを批判し、「日本人の好意を食い物にしている」と考えている人もいる。私自身も最初のうちは谷口氏との生活レベルのギャップに驚き、ヨハンに対して快く思えなかった。しかし、一般タイ人や若竹寮の生徒達はヨハンの生活について特に疑問も抱いておらず、むしろヨハンのことを「立派な」人物で、目標とされるべき人として尊敬している。ヨハンの生活レベルの高さは彼ら自身の目標とする生活と考えられ、生徒からは「将来自分もヨハンのような生活ができるくらいに立派な行いを」と常日頃考えているのである。これは、最初に述べたようにタイ社会が地位や経済力がある人物はそれ相応の生活を示すべきだ、とすることから由来していると考えられる。谷口氏に後継者が現れないのは、「立派な人」なのに「生活レベルを落としている」からタイ社会では理解しがたい人物と思われているのかもしれない。目標とされるには、その人の活動内容と同じくらいにその人の生活レベルが高いことという要素が必要となる。日本人が理想とする支援者の「清貧」さは、タイ社会には必ずしもなじまない。ヨハン批判が在タイ日本人に限定されるのも、私のヨハンと出会った当初の彼に対する戸惑いもこうした日本人の独特な価値観によって説明がつくのではないだろうか。また、ヨハンが管理しているとも思ってしまうかねない生徒達のワンパターンな手紙は、教養のレベルの低さであり、日本人から見れば稚拙な文章は、表現力の足りなさである。同年代の日本人の子供が書いた手紙と比べ、「ワンパターンだし、幼稚である」と判断してしまうのは、若竹寮の子供たちの文化による教養レベルの差を無視した意見である。ある程度は暖かい目で見えるべきであろう。なにごとも背景にある社会構造や平均的な教養のレベルの差を知っておかねば、ヨハンに対しても誤解を生む要因となる。

結論

ボランティアプロジェクトとは、どういったことを目的としているのだろうか。そもそも、日本人側は「支援を行なう」際に施設経営者の人格に対してのイメージが先行している傾向に

あると思われる。そのイメージとは、自己犠牲の精神を持ち、高潔で博愛の精神にあふれた人物こそ施設経営にふさわしく、人望も集まるというイメージである。確かに、ここで述べた人望とは日本人支援者からの人望という意味であり、ボランティアなどを行なう上で指導者に求められる要素である。しかし、こうした要素を持ち合わせた人物が必ずしも海外での活動で人望を集められるかどうかはわからない。日本人受けするか、現地受けするかは判断は、お互いの根底にある文化や社会構造の差異を知っておく必要がある。支援活動に本当に必要な要素は二つである。私は考える。成功の具体的な例（実績）を提示できることと、それが継続可能かどうかということである。日本人が海外で支援活動を行なう際、日本的な考え方で活動を続けていけば、谷口氏のように現地とすれ違いによる葛藤を生じるだろう。葛藤とまではいかなくとも、支援している側は不満による不信感を募らせたり、精神的な見返りを求められずに日本人支援者側では「支援している」という満足感を得られないまま現地人と理解し合えないという距離感に悩まされることになる。施設経営が継続可能かどうかは、支援金と後継者が必要である。支援金はプロジェクトを行なう人物が支援する日本人から「日本人にとって魅力的」に映るかどうか、現地で後継者を求める場合、プロジェクトを継いだ場合に「タイ人、山岳民族にとって魅力的」な見返りがあるかである。谷口氏は前者の「魅力」は十分に兼ね揃えているが、後者の「魅力」が足りていないために後継者問題に悩まされている。谷口氏が現地で日本的な価値観により生活しているからである。そのことは、21世紀農場の生徒と谷口氏のすれ違いからも考えることができる。ヨハンとは谷口氏とは全く逆で、「日本人にとって魅力的」ではないが、成功者としてのヨハンの暮らし振りは生徒達の意欲を奮い立たせ、十分に「魅力的」なプロジェクトなのである。ヨハンが支援金をうまく集めることができているのは、これまでの多くの実績と表彰の数、そして何より熊本YMCAの日本での窓口としての機能が充実しているからであろう。21世紀農場も若竹寮も共に日本人支援者からの支援金に頼ってい

るため、経営者自身の人格や振る舞いが日本人受けするかどうかは重要であろう。しかし、後継者に関しては現地での価値観を優先して考えるべきではないだろうか。タイ社会では目に見える成功が好まれるため、ヨハンの生活はひとつの成功例として現地で捉えられており、肯定的に見ることもできるのである。

ボランティアプロジェクトを行なう際、日本人はイメージ先行で理想を追求しがちである。しかし、現実のボランティアプロジェクトとして見た時に現地で成功するかどうかは日本人のイメージとあまり関係がない。日本で一般人が支援するということは、金銭面であることが多い。人格者と認めた人物に出資することで、「人格的なことをやっているのだ」という満足感を得やすいからである。しかし、実際に支

援現場に滞在してみると理想では片付けられない葛藤や文化の相違によるストレスが現実問題として散在している。今回フィールドとして選んだ21世紀農場と若竹寮は、何十年も継続して続いていることや経営者が数多くの功績を表彰されていることなどからも、ボランティア・プロジェクトとしては成功を収めているといえるだろう。しかし、実績とは無関係に、そして支援する側、される側の大きな努力があるにもかかわらず多くのすれ違いの事例を認めることができた。このすれ違いは両者の互いの文化への理解度の低さや、互いへのイメージ先行による誤解、思い込みが背景にある。これらの諸問題をひとつずつ解決していくことは可能であり、より身近に感じられる国際支援への足がかりになることが期待されるのである。

謝辞

この論文を作成するにあたり、多くの方々に助けていただきました。まず、今回の調査地である21世紀農場と若竹寮を紹介していただいただけでなく、お仕事の合間をぬってチェンライまで車を出していただいた市原さん。彼に出会うことがなかったら今回の調査は成り立っていなかったでしょう。本当にありがとうございました。

次に21世紀農場の谷口巳三郎氏。突然現れた私を歓迎し、農場滞在を許していただいたゆえに、パヤオの朝市やご自身が援助されているHIV支援センターにまで連れて行っていただき、感謝しております。谷口氏の一言一句が私にとって感慨深い発言であり、尾の意味を日本に帰ってからかみ締めています。どうか、お体に無理がないように頑張ってください。また、私の片言のタイ語に根気強く付き合ってくれた農場のスタッフの方々や高校生の方々にもこの場を借りてお礼申し上げます。

若竹寮の寮長ヨハン・チェルマー氏とミソ・夫人。本当に突然の滞在で多大なご迷惑をおかけしたことと思います。若竹寮の子ども達との生活やニューライフセンターの方々との滝遊びは最高の思い出になりました。本当にありがとうございました。

恵さん、規子さん、ピーヤイ、けい子さん、梨香さん、トゥク、ピーノイ、ベル、絵里子さん、竹内さん。私がタイで精神的に参ることなく過ごせたのは彼らのおかげです。ありがとうございました。

最後に帰国後の論文作成にあたり、協力していただいた熊本YMCAのスタッフの方々、ゼミ生の皆さん（中にはゼミ生以外も）、竹川大介さん、なかなか進まない原稿を辛抱強くバックアップしていただき本当にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

< 参考文献 >

- ジョージナ・アシュワース 1990 『世界の少数民族を知る事典』 明石書店
 大森絹子 1997 『タイ山岳民族カレン 国際保険医療活動の現場から』 朱鷺書房
 飯島茂 1973 N H K ブックス197 『祖霊の世界 アジアのひとつの見方』 日本放送出版協会
 川崎有三 1993 『アジアから考える〔1〕交錯するアジア』 東京大学出版会
 時事通信社 1996 『異文化との接点で 草の根協力の最前線から』 株式会社時事通信社
 世界人口白書2001 人口と環境の変化
 地球の歩き方FRONTIER 1990 『タイ北部山岳民族をたずねて』 ダイヤモンド社
 仲村優一 一番ヶ瀬康子 1998 『世界の福祉3アジア』 旬報社

資料

(表1) 産業別国内総生産額構成比

年次	農業	製造業	卸・小売	サービス業	その	G D P 合計
					他	
1970	25.9	16.0	18.4	11.4	28.3	100.0
1975	26.9	18.7	19.2	11.1	24.1	100.0
1980	23.2	21.5	17.6	14.0	23.7	100.0
1981	21.4	22.6	18.2	14.1	23.7	100.0
1985	15.8	21.9	18.3	14.5	29.3	100.0
1990	12.5	27.2	17.7	13.4	29.2	100.0
1995	10.9	28.2	16.4	12.7	31.8	100.0

註：1995年の数字は暫定値である。

出所：Thailand in Figures 1997-1998.

(表2) 地域別所得格差

地域および地区	年間家計収入(バーツ)		増加率 (%)	格差指標	
	1994	1992		1994	1992
都市部					
バンコク首都圏	197,016	191,412	2.9	100	100
中央部	153,312	136,968	11.9	78	72
東北部	156,828	132,492	18.4	80	69
北部	154,044	146,952	4.8	78	77
南部	149,724	143,328	4.5	76	75
村落部					
中央部	91,860	71,796	27.9	47	38
東北部	56,712	48,336	17.3	29	25
北部	64,944	51,732	25.5	33	27
南部	84,528	64,344	31.4	43	34

註：バンコク首都圏には、ノンタブリ、パトンタニ、サムプラカン県を含む。

中央部には、東部および西部を含む。

出所：Thailand in Figures, 1997-1998.

表3 山岳民族分布図

